

## 生物介在療法特別実習（一）（2単位）

担当者氏名 太田光明・浅野房代・土田あさみ・川嶋舟・内山秀彦

◆学習・教育目標（到達目標を記載）

動物あるいは植物を介在させた療法の実践に必要な技術の修得を目的として、以下の実習を行う。

動物介在療法学では、動物を介在した療法・活動・教育における技術、また研究方法を修得するため実習を行う。本学のバイオセラピーセンターおよび関連施設を実習の場として、対象者の評価方法と動物による身体的、精神的効果の定量化を図る手法について学び、また未だ主観的範疇の域を脱していない変動性の高い精神的影響の評価と定量化について、新たな手法による評価から本領域の研究力、創意性を身につける。

植物介在療法学では、園芸療法士としての職能を習得するための実習が必要となる。患者を知り、その患者に合う植物と、その植物とどのような関係を持つかが、最も必要とされるスキルである。認知症高齢者、精神疾患、脳梗塞、障害児を対象として、各施設に出向きプログラムの実施をおこなう。また、授業を通して、植物介在療法に必要とされる園芸全般の知識を身につける。

◆取り扱う領域（キーワードで記載）

<u>動物介在療法</u>	<u>介在動物の評価</u>	<u>対象者評価</u>	<u>プログラムの評価</u>
<u>植物介在療法</u>	<u>社会復帰</u>	<u>リハビリテーション</u>	<u>作業</u>

◆授業の進行等について

	テーマ	内容	準備学習(予習復習)等の内容と分量
1	ガイダンス	動物介在療法・植物介在療法における研究とその手法論について言及し、実習の進め方についてのガイダンス	本講義は人の心理変化を捉える一手段について理解を深め、また人を含めた生物の刺激応答性を理解し、動物との関係による生理的効果を学ぶ。特にストレス応答に関する動物の行動と、即したプログラムの進行を考察する。
2	心理尺度による対象者の評価(1)	動物との関わりがもたらす心身の影響について心理尺度を用いた評価を行う。また、こうした評価の客観性、有意性、そして問題点についてディスカッションから考察する。	認知症高齢者は、統合失調症あるいは脳神経系疾患を患う患者についての理解を深めるための意欲を持つこと。
3	心理尺度による対象者の評価(2)		よって、生物学の基本的知識ならびに人の疾患に関する点について予習し、実習を通して得られた内容記録は十分に復習しておくこと。
4	内的反応の評価(1)	動物との関係における人の生理反応について心拍変動解析を用いて測定し、評価の有意性、問題点について考察する。また、新たな評価法について、最新の医療から学ぶ。	
5	内的反応の評価(2)		
6	介在動物の特性(1)	介在動物の特性を理解し、対象者の心理および生理反応との適応性および介在動物の福祉的観点においてプログラム構成を考える。	
7	介在動物の特性(2)		
8	認知症高齢者施設について(認知症高齢者施設演習)	認知症高齢者施設についての理解	
9	認知症高齢者プログラム	プログラムの検討	
10	” 評価	認知症高齢者へのプログラム提供	
11	認知症高齢者 まとめ	” 評価	
12	精神病院(第6~9週)	校内にて症例発表	
13	精神病院を知る		
14	評価のまとめ	行なってきた動物および対象者の評価を統計的にまとめ、得られた成果のプレゼンテーションを行う。	
15	プレゼンテーション		

◆教科書及び資料（授業前に読んでおくべき本・資料）

書名／著者／発行所（発行年）

その都度に紹介する。

---

◆授業をより良く理解するために便利な参考書・資料等

書名／著者／発行所（発行年）

その都度に紹介する。

---

◆評価の方法（レポート・小テスト・試験・課題等のウェイト）

事前検討、プログラム、実践および評価に関するレポートおよび実習施設の評価を総合して行う。

---

◆オフィスアワー

随時メール等でのアポイントメントの上、研究室で質問等を受け付ける。

---

◆その他受講上の注意事項

本実習は所属する研究室ごとに実施する。

各自の指導教授および担当教員との綿密な打ち合わせを常に行うこと。

実習の実施内容については記録を残すこと。

特異的な実験機器の各種取り扱いに十分留意し、データの解析から得られる情報とその論理展開に至るまでの過程において各測定の目的を常に意識しておくこと。

---